

令和元年6月19日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26463549

研究課題名(和文) 地域住民と大学、看護学生による、がん患者と家族を地域で支えるシステムの構築

研究課題名(英文) Constructing a system to support cancer patients and their families in the community by using local residents, universities, and nursing students

研究代表者

岡本 理恵 (OKAMOTO, Rie)

金沢大学・保健学系・准教授

研究者番号：50303285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：この研究の目的は、地域住民と大学、看護学生などが地域で暮らすがん患者とその家族を協同で支えるシステムのモデルを構築することであった。2,611世帯を対象とした地域住民に対するがんについての意識調査では、がんに対するがん経験者と未経験者の意識の違いを明らかにした。がん経験がない者は、がん経験がある者よりがんに対し否定的なイメージを持っており、がん経験がない者を対象としたがん教育の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年がん医療の進歩や在院日数の短縮により、地域で暮らしながら闘病する患者が増えており、地域住民にとってがん患者を身近に感じる機会は増加している。しかしながら、本研究ではがんに罹患した経験のない人は、がんに罹患した経験のある人に比べ、依然としてがんに対する恐怖や否定的なイメージを持つ実態を明らかにしたことに意義がある。今後は地域住民に対するがん教育やがん患者や家族支援のための活動をさらに促進していく必要が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to create a model of a system to support cancer patients and their families in the community in cooperation with communities, universities, and nursing students.

The survey on cancer awareness administered to community residents in 2,611 households revealed different levels of awareness between those who had cancer and those who had no experience with cancer. Those that had no experience with cancer had a negative image of cancer compared to those who had experienced cancer, suggesting a need for cancer education for those who had no experience with cancer.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：がん患者 がんサバイバー がん教育 地域づくり

## 1. 研究開始当初の背景

日本人の死因の1位ががんとなって久しく、近年はがん医療の進展、在院日数の短縮などからがん罹患しながらも地域で暮らすがん患者が増加し、外来通院するがん患者数が入院患者数を上回っている。平成18年にがん対策基本法制定され、同基本法に基づくがん対策推進基本計画では、「がん患者を含む国民が、がんを知り、がんと向き合い、がんに負けることのない社会」を目指し、がん医療の向上と並び、がんについて正しく理解し学ぶことのできる環境の整備や、がんになってからも安心して暮らせる社会の構築を目標に掲げている。しかしながら、地域で暮らすがん患者やその家族に対する支援は十分ではない現状がある。

## 2. 研究の目的

本研究は地域で生活するがん患者が今後も増加することを見通し、がん医療対策の整備もさることながら、「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」を目指し、がんになっても患者やその家族を支えていける地域づくりを地域住民と大学、看護学生が一体となって行っていくアクションリサーチ研究である。また、現在看護大学は全国で200校を超えるが、本研究により看護大学が地域の拠点となってがん患者と家族を地域で支えるための貢献モデルを提示することが出来、さらにはその中で、学生が地域住民の生の声から学ぶという双方向のシステム構築を目的としている。本研究では第一段階として地域住民に対するがんに関する意識の調査を行い、地域で暮らすがんの経験が有る者(以下、経験者とする)と経験が無い者(以下、未経験者とする)の意識の違いを明らかにした。その後、第二段階としてがん患者とその家族を地域で支えるためのアクションリサーチを行う予定であったが、研究期間内にこの研究を行うことができなかった。本報告書では、第一段階の住民意識調査結果を中心に報告する。

## 3. 研究の方法

A県B市C地区に属する2,611世帯の20歳以上の者、4,939名を対象とした。

### (1) 調査期間

平成28年8月30日から平成28年10月31日

### (2) 方法

#### 調査方法

C地区の総会にて、連合会長及び全町会長に研究の目的・方法を説明したうえで研究協力を依頼し、地域住民に対して無記名自記式質問紙調査を行った。連合会会長には、総会前に研究の目的・方法を説明し、書面で研究協力の同意を得た。各町会長に町会回覧板での研究協力依頼のチラシの回覧と、調査用紙の配布を依頼した。調査用紙の配布は1世帯に上限を2部として必要部数を各世帯に配布し、単独世帯には1部の配布を依頼した。回収は同封の返信用封筒にて返送により行った。回収期間は配布後約3週間とした。

#### 調査項目

基本属性(年齢、性別、職業、配偶者、未成年の扶養家族の有無、身近な経験者の有無)、がん経験の有無、がんに対する意識、がん経験後の生活の変化、治療、家族以外の精神的支えを調査した。

#### 分析方法

がんに対する意識、がん経験後の生活の変化、治療、家族以外の精神的支えをがん経験の有無で比較し、さらにその中で年齢階級別、男女別で比較した。分析には<sup>2</sup>検定、t検定を用い、統計ソフトSPSS.ver21を使用し有意水準は0.05とした。

#### 倫理的配慮

本研究は金沢大学医学倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号:711-1)。

## 4. 研究成果

### (1) 質問紙の回収状況

C地区の2,611世帯4,939名に配布し、1,789名から回答を得た(回収率36.2%)。有効回答は1,511名(有効回答率84.5%)であった。

### (2) 対象者の概要(表1)

がんの経験別の基本属性を表1に示した。経験者は211名(14.0%)、未経験者は1,300名(86.0%)であった。平均年齢は経験者が71.4±11.4歳、未経験者が61.3±14.7歳で、経験者の方が、未経験者より高かった(p<0.001)。性別は男性が627名(41.5%)、女性が884名(58.5%)でがん経験の有無で割合に差は見られなかった。回答者全体のうち、家族や親戚にがん経験者がいる者は1,217名(81.1%)、家族や親戚以外の身近にがん経験者がいる者は957名(64.3%)であった。

表1 がんの経験別基本属性

項目	カテゴリー	全体	経験者	未経験者	p値
		n=1,511	n=211 人 (%)	n=1,300 人 (%)	
年齢	平均値±SD	62.7±14.7	71.4±11.4	61.3±14.7	<0.001 <sup>†</sup>
	20代	26	0 (0.0)	26 (2.0)	
	30代	92	2 (0.9)	90 (6.9)	
	40代	184	8 (3.8)	176 (13.5)	
	50代	261	17 (8.1)	244 (18.8)	
	60代	441	56 (26.5)	385 (29.6)	
	70代	316	78 (37.0)	238 (18.3)	
	80代	175	42 (19.9)	133 (10.2)	
	90代	16	8 (3.8)	8 (0.6)	
性別	男性	627	99 (46.9)	528 (40.6)	0.08 <sup>‡</sup>
	女性	884	112 (53.1)	772 (59.4)	
職業	会社員	256	13 (6.2)	243 (18.7)	
	公務員	69	2 (0.9)	67 (5.2)	
	医療従事者	82	7 (3.3)	75 (5.8)	
	自営業	125	11 (5.2)	114 (8.8)	
	学生	8	0 (0.0)	8 (0.6)	
	主婦	334	42 (19.9)	292 (22.5)	
	パート・アルバイト	165	18 (8.5)	147 (11.3)	
	無職	425	113 (53.6)	312 (24.1)	
	その他	44	5 (2.4)	39 (3.0)	
配偶者の有無	有	1,159	156 (74.3)	1,003 (77.2)	0.14 <sup>‡</sup>
	無	351	54 (25.7)	296 (22.8)	
未成年の扶養家族の有無	有	274	13 (6.3)	261 (20.4)	<0.001 <sup>†</sup>
	無	1,215	195 (93.8)	1,020 (79.6)	
家族や親戚にがんになったことのある人はいるか	はい	1,217	163 (78.7)	1,054 (81.5)	0.34 <sup>‡</sup>
	いいえ	283	44 (21.3)	239 (18.5)	
身近な人にがんになったことのある人はいるか	はい	957	148 (70.5)	809 (63.3)	0.04 <sup>‡</sup>
	いいえ	532	62 (29.5)	470 (36.7)	

<sup>†</sup>t検定

<sup>‡</sup>pearsonの<sup>2</sup>検定

は解析不可のものとした

### (3) がん経験の有無による意識や生活の変化の比較

「がんをどのくらい怖いと思いますか」という設問に対する回答は、経験者では「怖い」36.7%、「少し怖い」35.3%、「あまり怖くない」22.7%、「怖くない」5.3%であった。未経験者では「怖い」64.9%、「少し怖い」26.6%、「あまり怖くない」6.4%、「怖くない」2.0%であり、未経験者の方が怖いと回答した者の割合が高い傾向がみられた(p<0.001)。

また、「がんと聞いて死をイメージしますか」という設問に対する回答は、経験者では「する」23.1%、「少しする」47.1%、「あまりしない」21.2%、「しない」8.7%であった。未経験者では「する」58.5%、「少しする」35.5%、「あまりしない」4.6%、「しない」1.4%であり、経験者の方が死をイメージすると回答した者の割合が低い傾向がみられた(p<0.001)。

「がんになってから、生活における楽しみは変化しましたか(すると思いますか)」という設問に対する回答は、経験者では「増えた」7.3%、「減った」28.6%、「変わらなかった」64.1%であった。未経験者では「増える」4.6%、「減る」82.6%、「変わらない」12.7%であり、経験者の方が生活の楽しみは変わらないと回答した者の割合が高い傾向がみられた(p<0.001)。

「がんになってから、自分らしく生活できましたか(していくことができますか)」という設問に対する回答は、経験者は「はい」81.4%、「いいえ」18.6%であった。未経験者では「はい」42.0%、「いいえ」58.0%であり、経験者の方が自分らしく生活することができたと回答した者の割合が高かった(p<0.001)。

経験者に行った「あなたはがんになったとき、仕事を続けましたか」という設問に対する回答は、「仕事を継続した」65.2%、「勤務形態を変更して仕事を続けた」4.3%、「休職した」19.1%、

「退職した」11.3%であった。未経験者に行った「今あなたはがんになったとして、仕事を続けたいですか」という設問に対する回答は、「仕事を継続したい」23.2%、「勤務形態を変更して仕事を続けたい」32.7%、「休職したい」27.2%、「退職したい」16.9%であった。

尚、65歳未満群と65歳以上群の2群に分け、それぞれにおいて、がん経験の有無別に「がんをどのくらい怖いと思いますか」「がんと聞いて死をイメージしますか」「がんになってから生活における楽しみは変化しましたか」「がんになってから自分らしく生活できましたか」について分析を行った結果、がん経験の有無で同様の結果が得られ、年齢による影響はみられなかった。しかし、未経験者を65歳未満群、65歳以上群に分け比較したところ、65歳未満群の方が65歳以上群より死をイメージすると回答した者の割合が高い傾向がみられた(p<0.001)。

(4) がん経験の有無による治療の比較

経験者に行った「がんになる以前に思っていたよりがんの治療費はかかりましたか」という設問に対する回答は、「思っていたよりもかかった」25.4%、「思っていたよりはかからなかった」56.9%、「思っていた通りだった」17.8%であった。未経験者に行った「がんの治療は高額な費用がかかるとおもいますか」という設問に対する回答は、「思う」79.3%、「少し思う」18.7%、「あまり思わない」1.5%、「思わない」0.5%であった。

経験者に行った「あなたはがんになったとき、どのように治療を選択しましたか」という設問に対する回答は、「医師に一任した」54.8%、「医師と相談した」43.8%、「治療しない」1.4%であった。未経験者に行った「今あなたはがんになったとして、どのように治療を選択しますか」という設問に対する回答は、「医師に一任する」14.3%、「医師と相談する」80.8%、「治療しない」4.9%であった (p<0.001)。また、65歳未満群、65歳以上群それぞれにおいて経験の有無別に治療方法の選択を比較したところ、いずれも経験者の方が未経験者より治療方法を医師に一任すると回答した者の割合が高い傾向がみられた(p<0.001)。さらに、未経験者では65歳以上群の方が65歳未満群より治療方法を医師に一任すると回答した者の割合が高い傾向がみられた (p<0.001)。

(5) がんになったときの家族以外の精神的支え(表2)

経験者に行った「がんになってから家族以外で最も精神的支えになったのは誰またはどこでしたか」という設問に対する回答の割合は高い順に、「医療機関」が46.6%、「友人」が28.4%、「職場の人」が5.7%、「患者会」が2.3%、「近所の人」が1.7%であった。未経験者に行った「がんになったとき家族以外で最も精神的支えになるのは誰またはどこだと思いますか」という設問に対する回答の割合は、「医療機関」が44.8%、「友人」が29.5%、「患者会」が13.6%、「職場の人」が2.3%、「近所の人」が1.3%、「ホットライン」が0.7%であった。がん経験の有無に関わらず「医療機関」と答えた者の割合が最も高かった。経験者で「患者会」と回答した者の割合は低かった。

表2 がん経験の有無による意識・生活の変化・治療・精神的支えの比較

設問内容	経験者		未経験者		p値
	カテゴリー	人 (%)	カテゴリー	人 (%)	
がんをどのくらい怖いと思いますか <sup>†</sup>	怖い	76 (36.7)	怖い	839 (64.9)	<0.001
	少し怖い	73 (35.3)	少し怖い	344 (26.6)	
	あまり怖くない	47 (22.7)	あまり怖くない	83 (6.4)	
	怖くない	11 (5.3)	怖くない	26 (2.0)	
がんと聞いて死をイメージしますか <sup>†</sup>	する	48 (23.1)	する	757 (58.5)	<0.001
	少しする	98 (47.1)	少しする	460 (35.5)	
	あまりしない	44 (21.2)	あまりしない	60 (4.6)	
	しない	18 (8.7)	しない	18 (1.4)	
がんになってから、生活における楽しみは変化しましたか	増えた	15 (7.3)	増える	59 (4.6)	<0.001
	減った	59 (28.6)	減る	1050 (82.6)	
がんになったとき、生活における楽しみは変化すると思えますか <sup>‡</sup>	変わらなかった	132 (64.1)	変わらない	162 (12.7)	<0.001
	はい	166 (81.4)	はい	517 (42.0)	
がんになってからも、自分らしく生活していくことができると思えますか <sup>‡</sup>	いいえ	38 (18.6)	いいえ	715 (58.0)	<0.001
	今まで通り継続した	75 (65.2)	今まで通り継続したい	232 (23.2)	
今あなたががんになったとして、仕事を続けたいですか <sup>‡</sup>	勤務形態を変更して継続した	5 (4.3)	勤務形態を変更して継続したい	328 (32.7)	
	休職した	22 (19.1)	休職したい	273 (27.2)	
	退職した	13 (11.3)	退職したい	169 (16.9)	
	退職しなかった	22 (19.1)	退職しなかった	273 (27.2)	
がんになる以前に思っていたより、がんの治療費はかかりましたか	思っていたよりもかかった	50 (25.4)	思う	1,025 (79.3)	<0.001
	思っていたよりはかからなかった	112 (56.9)	少し思う	242 (18.7)	
	思っていた通りだった	35 (17.8)	あまり思わない	20 (1.5)	
がんの治療費は高額な費用がかかるとおもいますか <sup>‡</sup>	思っていたよりはかからなかった	112 (56.9)	あまり思わない	20 (1.5)	<0.001
	思っていた通りだった	35 (17.8)	思わない	6 (0.5)	
	思っていない	3 (1.5)	思わない	6 (0.5)	
がんになったときどのように治療を選択しましたか	医師に一任した	115 (54.8)	医師に一任する	184 (14.3)	<0.001
	医師と相談した	92 (43.8)	医師と相談する	1,040 (80.8)	
	治療しなかった	3 (1.4)	治療しない	63 (4.9)	
がんになってから家族以外で最も精神的支えになったのは誰またはどこでしたか	医療機関	82 (46.6)	医療機関	500 (44.8)	<0.001
	友人	50 (28.4)	友人	329 (29.5)	
	職場の人	10 (5.7)	職場の人	26 (2.3)	
がんになったとき家族以外で最も精神的支えになるのは誰またはどこだと思いますか <sup>‡</sup>	近所の人	3 (1.7)	近所の人	14 (1.3)	<0.001
	患者会	4 (2.3)	患者会	152 (13.6)	
	ホットライン	0 (0.0)	ホットライン	8 (0.7)	
	その他	27 (15.3)	その他	86 (7.7)	
	その他	27 (15.3)	その他	86 (7.7)	

pearsonの<sup>§</sup>検定

†経験者と未経験者に共通した設問である

‡未経験者の設問である

§無職と答えた人を除いた

は経験者と未経験者で選択肢が違うため、解析不可のものとする

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

岡本理恵、能登原寛子、表志津子、市森明恵  
地域住民のがんに対する意識調査 - がん経験者と未経験者の比較 -  
第 6 回日本公衆衛生看護学会学術集会 (2018)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

## 6 . 研究組織

( 1 ) 研究分担者

研究分担者氏名:表 志津子

ローマ字氏名 : OMOTE, Shizuko

所属研究機関名 : 金沢大学

部局名 : 保健学系

職名 : 教授

研究者番号 ( 8 桁 ) : 10320904

研究分担者氏名:市森 明恵

ローマ字氏名 : ICHIMORI, Akie

所属研究機関名 : 金沢大学

部局名 : 保健学系

職名 : 助教

研究者番号 ( 8 桁 ) : 80507369

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。